

都市の空閑地における建築的介入にみる時間的文脈と既存環境の再構成手法

Reconstitution Method of Temporal Context and Existing Environment on Interventions of the Unused Space Caused by Urban Infrastructure

奥山研究室 16M50085 織 大起 (ORI, Daiki)

1. 序

現代都市には、その発展における土木構築物の建設・廃棄に伴って生じる、高架下の空間や鉄道跡地などの低・未利用地が存在する。これらは一般的に空閑地と呼ばれるものの一つであるが、都市におけるこうした場所は、周辺の変化に対して時間が停止した都市の空白であると言える。近年、これらの空閑地を都市生活の場として改修・活用する取組みがなされており、そこでは、既存の土木構築物の特徴を活かした操作や、周辺環境の特徴を顕在化させる操作がみられる。こうした手法は、都市に内在する時間的文脈と土木構築物を取り巻く既存環境を引き受ける建築的介入と呼べるものであり、それは現代建築の可能性を思考する上で重要な題材と考えられる。そこで本研究では、都市の空閑地における建築的介入¹⁾を検討することで、時間的文脈と既存環境を再構成する手法の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 空閑地の時間的文脈と既存環境

都市の空閑地には、その発生から建築的介入が行われるまで、都市の発展に起因する様々な状態がある。例えば図1の分析例に示すNo.58では高速道路の建設に伴い高架下に空閑地が発生し、空き地として放置されていた。本章では、こうした空閑地の変遷を時間的文脈として作品解説文・図面・写真から検討する。また、No.58の解説文をみると、「フォリーでは...周囲の水路を探索する船旅が人々を迎え」のように周辺環境に存在する要

素(周辺要素)が設計に際し考慮されていることが読み取れる。ここでは、建築家が空閑地をとりまく環境をどのように認識しているかを捉えるため、周辺要素についても検討する。

2-1. 空閑地の時間的文脈

まず、土木構築物の種類をその空間的な性格から整理し(図2)、次に空閑地の成り立ちを、土木構築物の建設に伴い発生する【付随型】と、その利用停止によって発生する【廃棄型】に大別した(図3)。次に、建築的介入が行われるまでの空閑地の状態を空閑地の履歴として検討した(図4)。その結果、空閑地に立ち入りができるか否かで捉え、さらにその利用状態から、手加えられず放置された「空き地」、駐車場等、車両によって占拠された「車両用」、トラックやホームレス等に占拠された「スラム化」に分類した。さらにこれらの空閑地の成り立ちとその履歴の関係から、空閑地の時間的文脈を捉えた。

2-2. 空閑地の周辺要素

周辺要素は、『建物』、『自然地形』、『公園・広場』、『交通インフラ』、『地域』に分類し、さらに空閑地からの距離から、〈隣接〉、〈近景〉、〈遠景〉で捉えた(図5)。〈隣接〉が最も多く、その内訳をみると『自然地形』、『交通インフラ』、『地域』が多くみられた。

2-3. 空閑地の既存環境と時間的文脈の関係

空閑地の既存環境を土木構築物ごとの周辺要素の組合せから捉え、さらにそれらと時間的文脈との関係を示したものが図6である。その結果、高架、護岸では【付随型】が

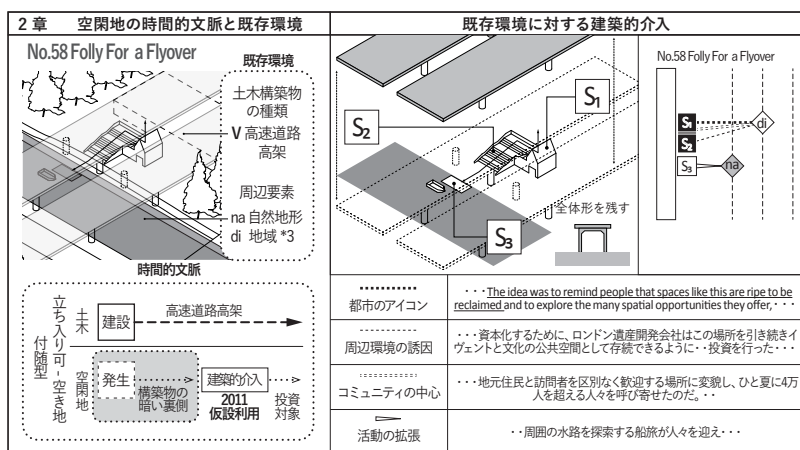


図1 分析例

V 高架49		R 地上架線10		U 地下道9		E 護岸24	
鉄道	28	鉄	道	3	道	河	川
道路	21	道	10	歩行者	4	海	岸
				道路	2	の	他
				鉄			

図2 土木構築物の分類

付随型	空閑地	付随型		付随型	付随型
		発生	発生	発生	発生
付随型	発生	発生	発生	発生	発生
	発生	発生	発生	発生	発生
	発生	発生	発生	発生	発生
廃棄型	発生	発生	発生	発生	発生
	発生	発生	発生	発生	発生
	発生	発生	発生	発生	発生

図3 空閑地の成り立ち

図4 空閑地の履歴

多いことに對し、地上架線では【廃棄型】が多い。さらに詳しくみると、高架においては立ち入り可の「スラム化」と「空き地」が多く、前者は周辺要素の組み合わせが「隣接」のものが多いのに対し、後者は「近景」のものが多くみられた。一方で護岸においては立ち入り不可が多くみられた。このことから、空閑地の発生以前の記憶の存在と発生後の利用の状態によって建築的介入の際に関係づけられる周辺環境の範囲は変化すると考えられる。

3. 既存環境に対する建築的介入

本章では、既存の土木構築物の改修における個々の操作と土木構築物に対する操作、それにより周辺環境に対してどのような関係性の形成を試みたかを周辺環境との関係性として、作品解説文・図面・写真から検討し、さらにそれらを周辺要素との関係を合わせて検討することで、空閑地における建築的介入の性格を捉える。

3-1. 建築的介入の程度 まず、資料ごとに既存の土木構築物の形への介入の程度について図面や写真から検討し、図8に整理した。

3-2. 土木構築物に対する操作 土木構築物に対する操作は、ボリュームや家具などの要素を付加する構築物的な操作と土木構築物周囲の地表面を改変するランドスケープ的な操作に大別した。さらに前者は、付加した要素のスケールにより細別し、後者は地表面の変化の程度により細別した。またこれらの操作のうち、かたちや構成など、土木構築物の性質に着目したことが作品解説文から読み取れるものを主要な操作とした（図9）。

3-3. 周辺環境との関係性 周辺環境との関係性は、土木構築物の形状を都市の軸として顕在化させるものや周辺の建物への動線を付加するものといった、既存環境の物理的特徴を利用するものと、市民に開かれたパブリック空間を設け、コミュニティの中心として位置づけるものや、都市に新たなランドマークを創出するといった、空閑地に新たな意味的性質を付加するものの二つで捉えた（以下、「物理的」、「意味的」）（図10）。

3-4. 建築的介入の性格 前節までに検討した周辺要素、土木構築物に対する操作、周辺環境との関係性を資料単位で統合し、モデル図として示した（図11）。次に、土木構築物に対する主要な操作を横軸に、周辺環境との関係を縦軸にとり、さらに建築的介入の程度と合わせて検討したものが図12である。その結果、構築物的な操作が主要な操作となるものでは、周辺環境との関係において「意味的」が相対的に多くみられることに對し、ラ

	隣接 (176)	近景 (56)	遠景 (20)
土木構築物	bu 建物 (11) na 自然地形 (49) pa 公園・広場 (7) in 交通インフラ (52) di 地域 (57)	bu 建物 (7) na 自然地形 (6) pa 公園・広場 (1) di 地域 (42)	bu 建物 (3) na 自然地形 (2) di 地域 (15)
<<隣接>>	40	5	1
<<近景>>	30	25	1
<<遠景>>	16	8	1

図5 空閑地の周辺要素の分類

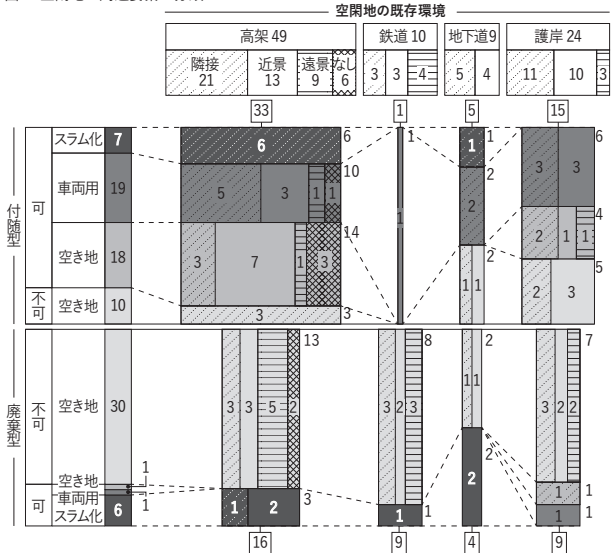


図6 空閑地の既存環境と時間的文脈の関係

全体形を残す	部分形を残す	全体形を変化
47	30	15

図8 建築的介入の程度

	構築物的な操作 120						ランドスケープ的な操作 109		
	覆い ボリューム Cv 14	充填 ボリューム Fv 23	分離ボリューム S1 15 S2 46 S3 22	地形化 T 39	緑地化 G 48	舗装 P 22			
対象の言及	あり 8	あり 8	あり 5	あり 18	あり 6	あり 11	あり 13	あり 10	
対象の言及	なし 8	なし 13	なし 10	なし 28	なし 16	なし 27	なし 35	なし 17	

図9 土木構築物に対する操作の分類と対象

既存の物理的特徴を利用					新たな意味的性質を付加		
都市の軸	都市の自然	位置関係の顕在化	活動の拡張	障壁を取り除く	都市のアイコン	周辺開発の誘因	コミュニティの中心
19	22	58	60	28	18	12	24

図10 周辺環境との関係性

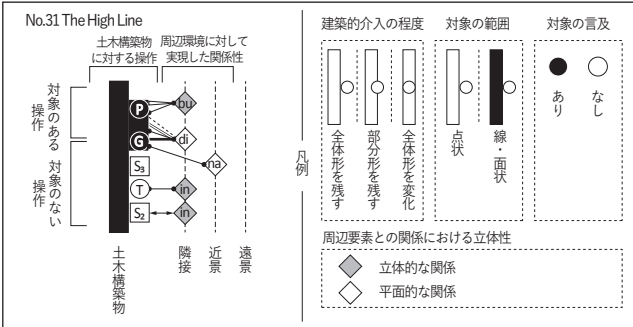


図11 建築的介入の構成

「スケープ」的操作が主要な操作となるものでは〔物理的〕が多くみられた。このことから、ランドスケープ的な操作による建築的介入では、都市環境を目に見える形で変化させていることに對し、構築物的な操作による建築的介入では、既存環境の特徴を顕在化させるだけでなく、新たな場所の意味を生み出す取組みがなされていると考えられる。

3-5. 建築的介入のパターン 前節で検討したモデル図における周辺要素の組合せから、建築的介入の5つのパターンを見出した(図13)。まず《Di型》は周辺要素が『地域』のみのものであり、〔意味的〕が多いことから、周辺環境を領域的に捉えているものであるといえる。続いて《In型》は、周辺要素が『交通インフラ』と『地域』のものであり、〈隣接〉と〔物理的〕が多いことから、都市の線的な連続に空閑地を接続しているものであるといえる。次に《In+Na型》は周辺要素が『交通インフラ』と『自然地形』のものであり、その双方に関係をつくることで、都市の中で自然と接続した場所をつくるものであるといえる。《Na型》は周辺要素が『自然地形』のもので、そこに接続することで都市の中で広がりを持った場所をつくるものであるといえる。《Com型》は周辺要素に『建物』を含むものであるが、様々な周辺要素を同時に関係づけながら複雑な関係性を構築しているものである。

4. 時間的文脈と既存環境の再構成手法

2章で捉えた時間的文脈と3章で捉えた建築的介入のパターンとの対応関係を示したものが図14である。3章5節で捉えたパターンの特徴を踏まえて、空閑地の時間的文脈と既存環境の再構成手法について考察する。

まず、《Di型》と《In+Na型》は時間的文脈との関係に偏りがみられない。これらは、空閑地にコミュニティの活動の中心となるような場を創出するものなど、空閑地に隣接した場所に意味を付加するものや、切り離されていた自然環境と都市空間を再接続するものなどであり、時間的文脈とは直接的な関連のない普遍的な手法であるといえる。

次に《In型》は、【付随型】の「車両用」と【廃棄型】の立ち入り不可の「空き地」に集中しており、また、〈隣接〉と〔物理的〕が多い。前者は、例えば空閑地となっていた地下道上部に新たなプラットフォームを挿入することで、空閑地周辺の交通ネットワークを変化させるものであり、後者は、利用停止後閉鎖されていた土木構築物に対しアクセスをつくり、新たな都市動線の一部とするものである。例え



図12 建築的介入の性格

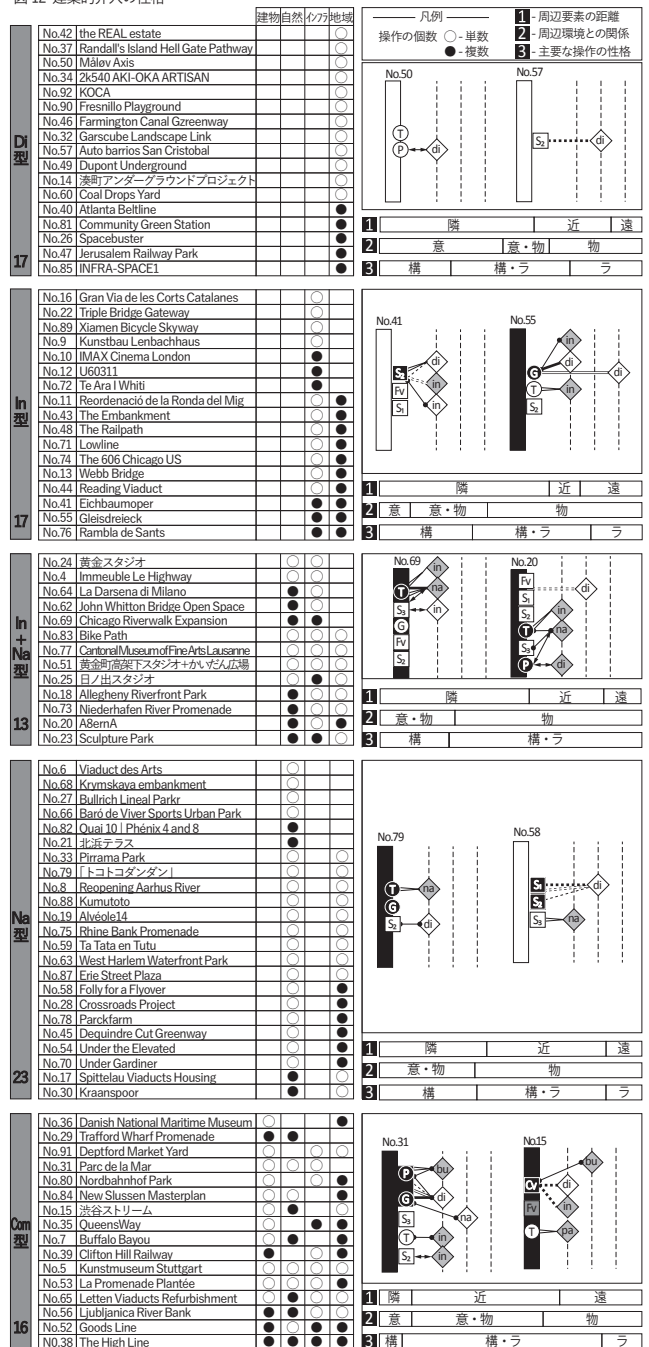


図13 建築的介入のパターン

ば No.55 では、隣接する鉄道高架と視覚的な関係を結ぶことで、都市の複雑化した交通網に位置する空閑地の存在を顕在化している。これらは、空閑地を都市空間における動線的な起点として位置づけ直す手法であるといえる。

《Na 型》は【付随型】の立ち入り可の〔車両用〕および〔空き地〕が多くみられた。《Na 型》は〈近景〉までの周辺要素と関係をつくる傾向がみられ、〔物理的〕が多いことを踏まえると、前者は、発生後に駐車場として占拠され、都市から切り離されていた自然環境を、エリアにおける活動の場とするものであり、後者は、例えば No.58 のように、放置されていた水辺に隣接した空閑地を、広範囲のエリアを射程としてコミュニティの中心として位置づけているものである。

《Com 型》は【廃棄型】の立ち入り不可の〔空き地〕に多くみられ、〈近景〉・〈遠景〉まで〔意味的〕、〔物理的〕な関係をつくっている。また、《Com 型》は同時に多数の周辺要素との関係をつくっている特徴があり、このことから、閉鎖されていた過去の利用と都市との関係の痕跡のある場所を、都市環境の様々な要素を結びつける媒

体として顕在化させるものだといえる。これは、同様に【廃棄型】の立ち入り不可の〔空き地〕が多かった《In 型》が空閑地を都市の流れの一部と位置づけたことに対し、周辺環境とのより強い結びつきが読み取れる。

4. 結

以上、都市の空閑地をその時間的文脈と既存環境で捉え、それらを再構成する建築的介入について検討した。その結果、周辺要素の組合せから建築的介入の 5 つのパターンを見出した。またそれらは、周辺要素の種類、周辺環境との関係とその射程とする距離と連関していることがわかった。さらに、建築的介入のパターンと時間的文脈の関係から既存環境を引き受ける 4 つ手法を位置づけた。これらは、現代建築の可能性を思考する上で重要な指標となると考える。

註 1) 本研究では、土木構築物の建設廃棄で発生した空閑地の内、土木構築物が残存している且つ、空閑地発生後、一定期間の低・未利用状態がある空閑地を対象とする。資料は産業遺構等、廃墟化した工業遺産の再利用に関する論考の増加する 1980 年代以降の国内外の建築雑誌に掲載されている作品を中心に資料として扱う。

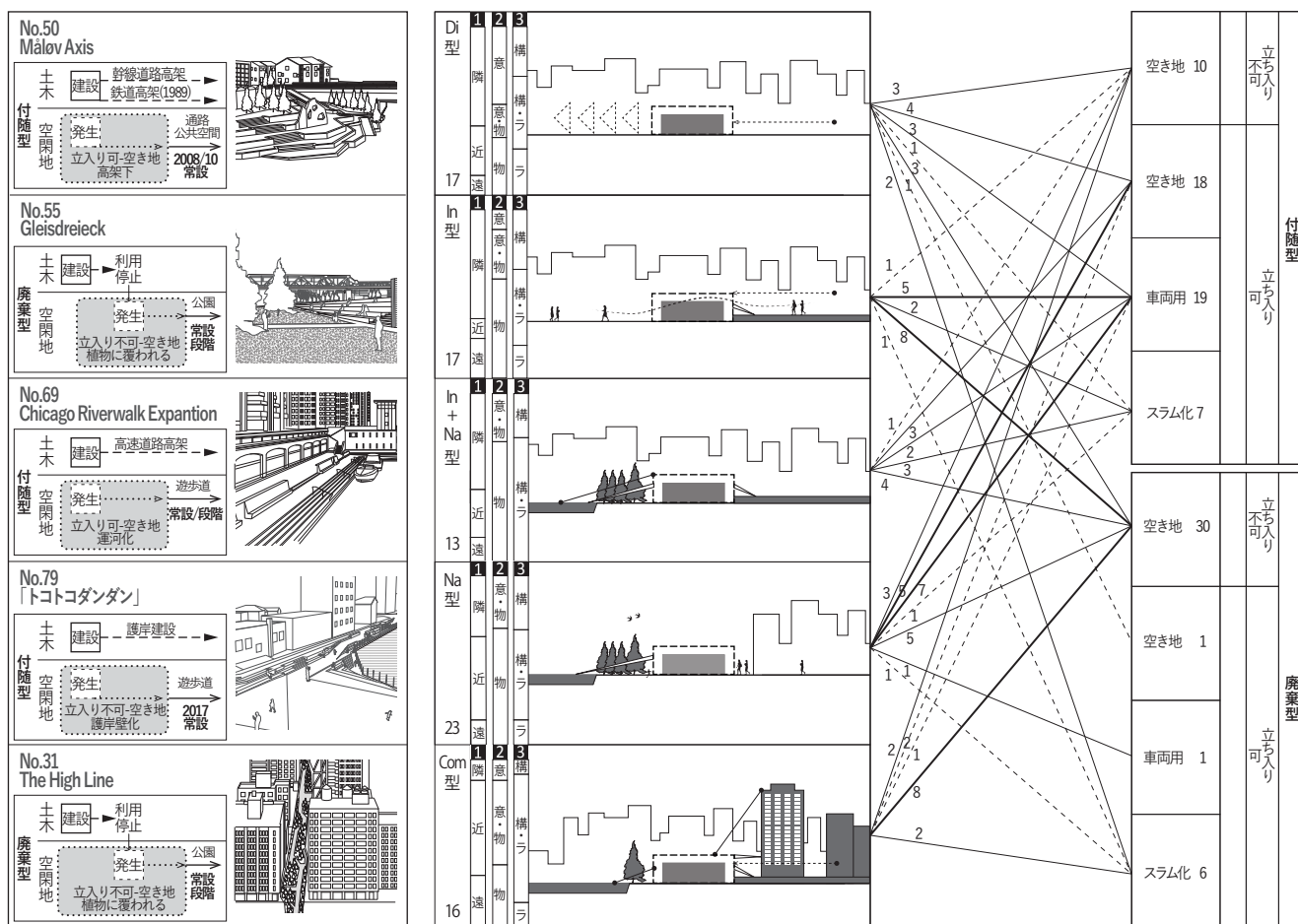


図 14 時間的文脈と既存環境の再構成手法